

ロンリー・マスク

野口津義夫

悪徳を描いたデカダンス文学

芳夫は復讐を考えていた。それも効果的な復讐を。表面的にではなく深遠的に、一時的にではなく持続的に、ずっしりと重く久しい完全犯罪のような復讐を一。

ロンリー・マスク

はじめに

閉ざされたエリアでしか暮らしたことの無い人間が、外の世界の豊饒を知らないように、人間の内なる世界も、空間的なエリア同様、その境界を打破することによって発展が望まれる。例えば、悪を知らない人間は、善とは何かと聞かれても説明することはできない。よって、美德を描く小説だけが健全な小説とは言えない。むしろ、悪徳の数々を物語の中で提示することによって、善の何たるかも解明できるものと信じる。

ただ、人間の内的なことに關しては、空間的なエリアのように、単に広い狭いという概念だけでは容易に説明がつかない場合がある。というのは、本小説の主人公のように、いかに悪徳に満ちた人間であっても、十分「心の広い」才智ある人間もいるからだ。断っておくが、このことによつて私は別に悪を推奨するつもりはない。だが、「心の広さ」という言葉の概念には既に美德の意味が包含されていて、当初から肯定的なるものを前提としているようだ。

さて、客観的に観てみよう。悪徳に満ちた本小説の主人公は、「心の広い」人間である。換言すれば、「心の広い」悪人である。然らば、空間的なエリアの発展に照らして考えれば、どう解釈すべきなのか。それは、「心の広い」限らない悪を描くことによつて、「心の広い」限らない善の理解の助けとなる、ということに尽きると思う。

ところで、生来、善いことしか行つたことのない人間はいないと思うが、もし、いるとしたなら、その人は果たして本当に善人と言えるだろうか。というのは、相当の悪を犯した人間が、普

通の善人以上に善人になったりすることが間々あるからである。何かエネルギー保存の法則に似てはいまいか。

序

私の知人で、幸福な人間を見ると石を投げたくなる、と言った人がいた。はなはだ危険な発言ではあるが、何か一笑に付すことのできない人生の趣が内包されているように思う。幼少の頃から不遇で、孤独な家庭環境の中で育ってきた人間にとっては、人生とか社会とかいうものは忌むべき怨念の対象であるのかもしれない。

野川芳夫も、そのような境涯の中で少年期を過ごしてきた人間だった。成績が優秀であったにもかかわらず、家庭が貧しかったために大学に進学することができなかった。豊富な知力の捌け口を遮断された時の悔しさは、芳夫にとっては計り知れないものであったにちがいない。こんなわけで彼の人生や社会に対する憤怒は募るばかりであったが、その原因は他にもあった。非凡な知力を有していたにもかかわらず、生まれつき偏執的で我が儘であった彼は、人の意見を軽視し、自分本位の創造的考えで何事も押し通してきた。その結果、学校の友達は勿論、親兄弟にさえ愛想を尽かされてきたのだった。

しかし、芳夫には芳夫の考えというものがあつた。なぜ周囲の人は自分の考えに耳を貸さうとしないのか。確かに自分は普通じゃないということには分かっている。だが、どう考えても自分が正しいように思われる時も、お前は異常だとか、それは間違っているとか言つて、誰も本気で自分の意見を聞いてくれる者などいなかった。こんな時、芳夫は激しい孤独を感じた。果たして自分のような性格の人間は人生を生きていけるのだろうかと考えると、芳夫は限りない不安と激

しい自己嫌悪とで胸が一杯になるのだった。そして学校の裏庭に身を隠して、詩や短文作りに励むのだった。ちよつとした気分のままに書いただけの詩や短文が雑誌や新聞に掲載されたりすると、先程の劣等感が忽ち優越感に早変わりし、芳夫は自分を天才ではないかと思うのだった。

野川芳夫は美しい雪国の城下町、秋田市に生まれ、高校時代までそこで過ごした。この間、彼によって作られた数篇の詩や短文は、地元の新聞社や出版社の書庫の中に保存されている。

高校を卒業して上京した芳夫は、立川にあるプラスチック工場に成型工として就職した。仕事は単純な作業なので辛くはなかったが、自分の本質を押し殺して働いていかなければならないことに、芳夫は耐え難い苦痛を味わった。何か自分が、自分の意に副わない方向にどんどん流されて行くような気がして、不安で堪らなかった。自分のような豊かな知性を持っている人間が、なぜ、こんな労働に従事しなければならないのかと思うと、情けなくて悲しくなった。心の奥底で、学問をしたいという抑制し難い欲求が溶岩のように噴出して来て、苛立ちを覚えたことも度々あった。

芳夫は人生を呪い、社会を呪い、こんな性格を持って生まれた自分自身にさえ嫌気がさして、投げ遣りな毎日を送っていたが、両親の反対を押し切って家を出て来た以上、ここで暫く耐え忍ぶ以外に為す術もなかった。

上京してから一箇月程経った、ある日の夕方、仕事から解放された芳夫は、ちょっと、ぶらぶら歩いてみたくなつた。彼のアパートは日野駅から少し東へ歩いた所にあつたが、電車で通勤していた芳夫は、会社からそこまで歩いて行く道筋は分からなかつた。それでもよかつた。歩いてみたかつた。ぼんやりと眺めた家並に桜の花が咲いている。奇麗で寂しく、そのくせ華やかでもある花の色に、古里の匂いが甦つた。

両親と喧嘩して、不良のように家を出て夜桜を見に行つたのは中三の時だつた。秋田城址、千秋公園の坂を上つて、三の丸、そして二の丸へと人々は歩いて行く。八時過ぎでも大勢の人がいた。夜店も、まだ開いている。悪事を働いた時の夜桜は結構美しいではないかと思いつつ、あちこち覗きながら歩いていると、まともな人間の美的感覚の劣悪さに涙が出て来た。すると、学校の先生が衛生上好ましくないと云つた焼きイカが食べたくなつた。

「イカ一丁！」

芳夫は金を出して叫んだ。

「あいよ」

鉢巻をした男が大きなイカを選んで芳夫に差し出した。そして、

「大きい奴を食べて大きくなつてよ」

と言つて、芳夫に微笑んだ。

「ありがとう」

芳夫は嬉しくなつて男に微笑み返した。夜の公園が、夜の桜が自分を素直にさせているように思えた。

坂を上り切つた所に、広い歌壇のある芝生を両側に控えた道があつた。真つ直ぐ行こうか、それとも左側の石段を上ろうかと迷つたが、芳夫は石段の方の道を選んだ。長い段の途中で、何となく振り返つて下を見た。自分の後から人が大勢上つて来る。

「俺は一人ぼっちじゃないんだ！」

思わず口走つた独り言に、芳夫はびっくりした。

石段を上り終えて、芳夫は満開の桜をぼんやりと眺めていた。花の色は、真つ黒い夜空に反映して白っぽく見えると思っていたら、昼の桜より桃色っぽく見えるのが不思議だつた。すると、

「わたしにもイカ買つてよ」

と言つて、一人の少女が近づいて来た。その時、さすがの芳夫も驚いた。成績優秀、品行方正で、おとなしい性格ながらも副委員長の務めを果たしている、学校中の憧れの的の由布子であつた。

「わたし、お金持つてないの。駄目なら、そのイカ、半分食べさせて——」

芳夫は一瞬、由布子が気が狂つたのではないかと思つた。

「こんな時間に駄目じゃないか！」

と言つた後で、自分のことを棚上げにして、人に忠告を施している自分に芳夫は呆れた。

「とにかく座ろう」

芳夫は由布子をベンチに導いた。

「由布子さん、一体どうしたんだ。由布子さんとは思えないじゃないか！」

ベンチに腰掛けるや否や、芳夫は由布子に言った。

「ちようだい」

と言つて、由布子は手を出した。芳夫は残りのイカを由布子に与えた。由布子は食べ終わると、「ありがとう。おいしかったわ」

と言つて、ハンカチを出して口を拭った。夜目にも鮮やかな白いハンカチに、イカのタレと一緒には口紅が付いていた。それを見ながら、

「駄目じゃないか。そんなことをして！」

と言つて、芳夫は由布子を叱った。不良っぽく笑つて、由布子は芳夫の体に凭れ掛かってきた。下方の町の灯火を見ながら、芳夫は世界の皆が寂しいような気がした。

芳夫は、どこをどう歩いているのか分からなかった。電柱に錦町と表示されてあつた。やがて前方に公園が見えてきた。酒屋の自動販売機が目付いたのでワンカップを一つ買った。六時になろうとしていたが、まだ明るかった。ベンチに座つて、ポケットからワンカップを取り出した。プラスチックの蓋を取り、栓を抜こうとしたが、開け方の不慣れな芳夫は少し零してしまった。「まいったなあ」

続きは
完成版で
お楽しみ下さい。